

アレルギー専門の“かかりつけ” として、「24時間365日」活動

Active
no.34

「原動力」は、
元気になった子供たちの笑顔とママの笑顔

「元気になった子供たちの笑顔と、ママの笑顔が、わたしの原動力です」と話すのは、さくら薬局春日部藤塚店の管理薬剤師・神山めぐみ氏です。喘息やアレルギー、アトピー性皮膚炎などを専門とする小児科クリニックと連携して、いつでも相談を受け付ける、「24時間365日薬剤師」として、また小児アレルギーエデュケーター（PAE）として、お母さんたちの心のケアも行っています。その専門性と幅広い経験、信頼の結果として約3,600人の患者から、かかりつけ薬剤師として頼られています。年に複数回、保湿剤の「塗り方講座」を開催するほか、学校薬剤師や休日夜間診療事業などへも参画し、さらに医療的ケア児の在宅療養も支援しています。小児科医療におけるポイント“母親対応”などについて伺いました。



クラフト株式会社
さくら薬局春日部藤塚店（埼玉県春日部市）
管理薬剤師 薬局長
神山 めぐみ（かみやま・めぐみ）氏

Profile

北里大学薬学部を卒業後、埼玉医科大学付属病院薬剤部に2010年まで勤務し、同年調剤薬局へ転職。2014年からクラフト株式会社さくら薬局春日部藤塚店に勤務し、管理薬剤師を務めている。2015年に日本小児臨床アレルギー学会のPAE（第6期生）、その後エキスパートPAEを取得。2021年に日本アレルギー疾患療養指導士認定機構のアレルギー疾患療養指導士（CAI、第1期生）を取得。現在も多くの小児アレルギー関係学会に所属し研鑽を積んでいる。

大学病院で小児科医療全般に携わった後、小児アレルギー領域に注力

小児アレルギーに取り組むことになったきっかけを教えてください。

神山 元々は、隣接する診療所「おかだこどもの森クリニック」院長の岡田邦之先生が勤務されていた、埼玉医科大学病院の小児科病棟を中心に約20年間働いていました。岡田先生が2010年10月に独立・開業する時に誘われ、同時に立ち上げた薬局へ転職し11年ほど経ちます。岡田先生とは病院時代からの付き合いになりますので、治療方針や考え方などは良く把握していま

す。

ご専門が小児アレルギーですので、患者さんは喘息やアトピー性皮膚炎、食物等のアレルギーのお子さんを中心で。多くが小学生以下で、生後数ヵ月という乳児湿疹の赤ちゃんもいます。そのためお母さんとの信頼関係の構築が重要です。また、乳児湿疹の場合、保湿剤の塗り方が大事なので、外来での服薬指導とは別に、2～3年前から年に2回ほど、塗り方講座を開いています。店内スペースの都合上、毎回2人、多くても3人までですが、お母さん方には好評です。



塗り方講座の様子



お母さんたちとの信頼関係で重視していることや、病院時代との違いを教えてください。

神山 お母さんたちに寄り添うというか、お母さんたちの「一番の味方になるよ」と、伝えることが大事です。病院にいた頃はちょうど薬剤師が病棟に行きだした時期で、私は小児科病棟に病棟薬剤師として配属されました。病棟には外来と違って、小児がんや先天性心疾患の子供たち、まさに生死の境にいるよう子供たちがいました。

病棟では医師や看護師とは違う視点でお母さんたちの疑問や不安に対応するよう心がけました。特に薬の使い方なども含め、広く薬に関することを薬剤師としてわかりやすく説明すると、入院でいっぱいのお母さんたちにゆとりができ入院中の子供へ笑顔で接することができるようになります。

当時から患者さんのために、自分ができるとは全部やろうという気持ちでいたので、そのためには常に知識を増やし、勉強しなければいけないと思っていました。

調剤薬局に転職してからは、クリニックの患者さんですので、風邪などの急性期の子供たち、喘息やアトピー性皮膚炎、食物アレルギーの子供たちが多く来局

します。勉強のために日本小児臨床アレルギー学会など関連学会に毎年参加しました。同学会には小児アレルギーエデュケーター（Pediatric Allergy Educator；PAE）という制度があつて、第4期までは看護師さんに限られていましたが、5期からは薬剤師も受験可能となり2015年に第6期生に合格しました。現在は11期、でも薬剤師の有資格者は少なく全国で62人（2022年2月現在）です。

この資格を取るには5年以上のアレルギー専門医（日本アレルギー学会認定）のもとでの臨床経験、講習会の参加、試験、指導症例実績の報告などが条件となり、取得まで概ね1年はかかります。5年ごとの更新も必要で、更新にはある程度の臨床実績と決められた人数の指導実績症例報告が必要になります。

また、新たに2021年から日本アレルギー疾患療養指導士認定機構のアレルギー疾患療養指導士制度が始まり、PAEの多くが資格を取得しています。私も、第1期生として認定試験を受け、資格を取得しました。

PAEの仲間のなかには薬剤師も看護師さんも異動があつたり様々な理由で、更新できないという人もいます。私は、同じ環境で仕事を続けることが出来ていて、アレルギー関連の仕事が継続できるのは幸せなのかなと思います。

“かかりつけ”以前から、多くの「神山担当」患者さんに対応

資格を取る前と取った後で、何か変化はありますか。

神山 「先生から喘息といわれてしまった」と、大概のお母さんはショックを受けて来局されます。専門の勉

強もしましたし、先生の治療方針等も理解していますので、「根気よく治療していけば良くなります」と優しく説明するようにしています。PAEとして心理学、行動科学についても学んだので、お母さんたちの不安な気持ちをやわらげることに役立っています。

資格を取ることで、信頼度も高くなります。説明する時には、私はこういう専門の資格を持っているので、「疑問や不安なことを相談してもらっていいですよ」とお話します。結果的には、その信頼性がかかりつけ薬剤師の承諾につながっています。

2016年4月1日からかかりつけの制度がはじまり、承諾を得るようになってから、今では約3,600人に及びます。当初は、来局者に「今日から、かかりつけ薬剤師ができます」と話すと、反響がすごく、一時、受付をストップしたくらいでした。はじめた頃はクリニックの患者さんのうちで来局するのは7割程度でしたが、かかりつけの患者さんが増えるにつれ約8割の患者さんが来局しています。

ただ、私の中でかかりつけ薬剤師は、たまたま後から制度が付いてきたという感じです。当初から、「神山担当」という形で、アレルギー全般については担当していました。当時から、「何かあったら連絡してね」「夜でも困ったら連絡くださいね」と声掛けし、24時間、電話相談を受けていました。

携帯電話に薬局への電話が転送されるので24時間つながります。ですから、「何かあったら薬局に電話かけてね。必ず私につながるの」と話しています。その言葉はお母さんにとっては心強いことのようにです。

夜中に電話がかかってくる場合もあると思いますが。

神山 夜中の1時、2時に電話が来ることもあります。先日も夜11時頃、喘息とは関係ないのですが、子供が泣きやまなくて、「泣きすぎてヒクヒクしてるけど、どうしよう?!」という、電話が来ました。アレルギー以外の子も沢山いますし、電話での相談はとても広い範囲にわたります。大学病院での経験が役に立つこともあり、長く仕事をしてきて良かったと思う瞬間です。もちろん、日中も電話が来ます。1日4～5件ありますが、前述のように、ほんのちょっとしたことです。

「一緒に飲んでいいの？」等の飲み合わせのこと、「嫌がって薬を飲まない、どうやって飲ませればいいのか？」等の薬の飲ませ方、「ゼイゼイしちゃったけど、吸入をやった方がいいかな？」という感じです。

悲しいことに患者さんは目の前にはいないので、「みてないから、はっきりしたことが言えないけど」と前置きをした上で、対応の仕方を説明しますが、症状によっては「これ以上悪くなったら救急車を呼んでね」と言うこともあります。これら時間外対応はかかりつけ薬剤師の評価の中に含まれ点数はありませんが、かかりつけというのは、そういうものだと思います。

子供が小さい時、「喘息の気がある」または、「喘息かも」などと言われると、自分のせいではと悩んだり、精神的に追い詰められるお母さんもいらっしゃいますか。

神山 喘息治療は年々進歩しています。親は自分たちが小さい時をイメージして、「この子も同じような苦勞をするんじゃないか」と思っている人が沢山います。そういう親の心理に寄り添うことが大切です。学会での研修や自分の経験も含め、「パパやママのせいではないから、自分を責めたりしないでね」と、しっかり伝えています。重ければ重いほど親が追い詰められることもありますので。

もちろん、対応には個人差があります。先生に「喘息です」と言われて泣いてしまったお母さんには10分、15分と時間をかけて話します。治療経過のなかで、状態が良くなった時は「よかったね!」「頑張ったね!」と、満面の笑顔で、もちろん、子供と親と両方を思いっきり褒めます。逆に、治りが悪かったとしても、「大丈夫、少しずつ良くなっているから」と慰めたり、「あとちょっとだよ」と励ましたりします。そのあたりは、通常のかかりつけ薬剤師とは違うところかもしれません。

医療的ケア児の在宅、休日夜間診療対応、学校薬剤師など多彩な活動展開

在宅患者の訪問指導のほか、春日部市の休日夜間診療事業にも対応されていると伺いましたが。

神山 小児の在宅訪問をしています。お母さんの都合

もあるので昼休みの時間帯や、夜または日曜日になります。いまは4人の重度障害を持つ医療的ケア児のお宅に伺っています。月に1回、お薬を持っていき、患児の状態、様子を聞いてきます。ほぼ状態は変わらない

いのですが、便秘になったり、痙攣が続いたりすることもあります。

皆、胃腸を造設していますので、薬をつくるのは大変です。全部が粉、または液剤で、薬の種類も多いので、粉をはかったり、粉碎したり、分包、印字して、液剤をはかったりと、多い子は10種類くらい飲んでいるので3時間くらいかかることもあります。

お付き合いの長い子は既に7年くらいになります。最初のきっかけはお薬手帳を見たときに、経腸栄養剤を経管で投与している状況を認め、お母さんに「これどうしているの?」と聞くと、「近くの薬局にもらいにしている」。「だったら、在宅訪問の制度があるから、持っていこうか?」と話しかけたことです。その後、口コミなどで患者さんが増え、途中で亡くなった子もいますが、いまは4人の患児宅を訪問しています。玄関先だけの時もありますが、部屋にあがる時には、その子の顔を見て話しかけ、お母さんに様子を伺います。春日部市の休日夜間救急については、月2回、夜7時から10時くらいまで、市立医療センターのわきにある春日部市小児救急平日夜間診療部に行っています。

今後していきたいことがありますか。また、後

進育成について教えていただけますか。

神山 私は学校薬剤師でもあるので、新型コロナ流行前は、担当の小学校だけでなく、放課後児童クラブや中学校、幼稚園等でアナフィラキシーショックのためのエピペンの自己注射の講習会を、毎年3、4カ所で行っていましたが、いまはできていません。是非、やっていきたいと思っています。

アレルギー疾患の患者さんは増えていますが、興味を持つ薬剤師が少ないというのが現状です。ただ、PAEを目指している若い方もいます。離れたところですが、SNSを介して私なりのアドバイスなどをしています。

日々の電話相談の内容は多様で、クリニックを受診する子供たちはアレルギーばかりではなく多様な病気を抱えています。また、在宅の子供たちも多様です。大学病院での経験が役に立つこともありますが、学会やセミナーに参加して、常に勉強していくことが重要です。まだまだ知らないことが沢山あり、もっと勉強しなければと日々反省しています。その原動力は、元気になった子供たちの笑顔と、ママたちの笑顔かも知れません。